

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：34602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720355

研究課題名(和文) 朝鮮近世の交通路と交通手段に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A basic research on traffic routes and means of transportation in early modern Korea

研究代表者

長森 美信 (NAGAMORI, Mitsunobu)

天理大学・国際学部・准教授

研究者番号：50412135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、朝鮮交通史研究の一環として、朝鮮近世の交通路および交通手段がいかなるものであったのかを考究することであった。そのための基礎作業として、(1)朝鮮時代の古地図や地理書にあらわれる地名の収集と分析を行い、(2)朝鮮伝統船の船体構造を分析することで朝鮮船の特徴を明らかにするとともに、(3)それらの交通路や交通手段(船)を用いて人々がどのように移動したのかを考察した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to analyze the traffic route and the means of transportation in early modern Korea. The main results were below. (1)Analysis of historical place names in old maps and books. (2)Analysis of the structure of traditional Korean ship. (3)Clarification of the actual movement of people by the traditional route and ships in early modern Korea.

研究分野：朝鮮史

キーワード：朝鮮史 韓国史 歴史地理 交通史 船舶史

1. 研究開始当初の背景

開港期～植民地期の朝鮮における鉄道敷設や幹線道路の整備、蒸気船の導入等が、半島内の交通路および交通手段を大きく変容させたことはすでに通説といえる。しかし、植民地期以前の交通路および交通手段の実態については、実は不明な点が多かった。

その最大の原因は、国内外の朝鮮史学界における交通史分野に対する関心の低さにあった。たとえば史料上に見える地名の現地比定は、歴史学研究における重要な作業の一つであるが、学術的な利用に耐える高精度な朝鮮地域の歴史地図はまだない。また、前近代の重要な交通手段であった伝統船に関する研究蓄積も、他地域に比べると十分ではなかった。

前近代朝鮮の交通史研究を進める上で、古地図や地誌などの歴史地理関連資料の収集と分析、朝鮮伝統船関連資料の収集と分析がまず必要な状況にあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は次の5点に要約できる。

(1) 朝鮮近世の古地図、地理書等、歴史地理関連資料の伝存状況、所蔵・管理状況を把握する。

(2) 朝鮮近世の地名を収集する。周知のごとく、地名は変化する。古地図や地理書に見える地名について、可及的多くの異称・異表記を収集する。

(3) 朝鮮近世の交通路を復元する。(2)で確認した地名について、近世の古地図、植民地時代の地形図、現代の地形図等を利用して現地比定を行い、これを地図上に復元する。

(4) 当時の重要な交通手段であった船舶とその運用体系を考究する。

(5) 如上の交通路や交通手段を利用した人と物の移動の実態を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 日本・韓国を中心に、国内外の図書館・博物館等、資料所蔵機関が発行する目録等により、朝鮮近世歴史地理関連資料の現況を確認し、実見の必要がある資料については所蔵機関で調査を行った。

(2) 朝鮮中近世の地理書および古地図にあらわれる地名を収集した。『ソウル地名辞典』(ソウル市史編纂委員会、2009年)、『京畿道歴史地名辞典』(韓国学中央研究院出版部、2011年)など、近年韓国で編集・刊行された地名辞典や地名便覧所載の地名についても改めて分析した。

(3) (2)で収集した主要地名の現地比定を行った。近代化によって地形が大きく変化した

場合、比定作業は困難になるが、朝鮮近世の古地図と朝鮮総督府陸地測量部作成の5万分の1地形図および韓国国立地理院発行の5万分の1地形図を対比分析することで一定程度の精度を確保できるよう努めた。

(4) 朝鮮伝統船に関する文献資料および絵画資料や写真資料などを収集、分析した。朝鮮近世の伝統船に関するまとまった記述をもつ一次史料は少ない。そのなかで、日本に派遣された通信使が利用した船(使臣船)に関しては、使臣当人の記録(使行録)や、日本で使臣船を実見した人々による日記や絵画資料が残されている。これらを収集、分析する一方、植民地時代に朝鮮総督府水産試験場が行った在来型漁船に関する調査報告を分析した。

(5) 如上の交通路と交通手段を利用した人々の移動の具体例として、朝鮮時代の王都漢城(ソウル)南郊を流れる漢江に設置された津渡(渡し)制度の歴史の変遷および利用様相について研究を進めた。史料上にあらわれる津渡名を比定する際には、その精度を高められるよう、漢城(ソウル)・京畿地域を対象とする地図資料40種余りを比較対照した。

4. 研究成果

(1) 朝鮮歴史地理関係資料に対する現況調査を通じて、地図資料の取り扱われ方が様でないことがわかった。

地図はその形態によって、地図として扱われることもあれば、図書として扱われる場合もある。また美術品として所蔵・管理されている場合も少なくないため、網羅的な資料調査、現況確認は容易でない。収集した個々の書誌情報をデータとして整理する際にも工夫が必要である。朝鮮の地図資料を体系的に整理した唯一の目録である『国立国会図書館所蔵朝鮮関係地図資料目録』(1993年)を参考にデータベース化の準備を進めている。

(2) 朝鮮中近世の地理書、古地図にあらわれる地名を収集した。朝鮮時代を代表する三つの地理書(『新增東国輿地勝覧』16世紀、『輿地圖書』18世紀、『大東地志』19世紀)にみえる地名を収集することで、大まかな地名の変遷が整理できた。

古地図資料の現伝状況は、対象とする地域によって偏りがある。ソウル・京畿地域については約40種余りの地図を比較することができたが、郡県単位の地図が数点しか確認できない地域もある。なお、古地図資料の大部分は19世紀以降のもので、相互に時期的な差はないにもかかわらず、地名の異称や異表記がしばしば見られることが分かった。口頭発表「前近代朝鮮の地誌・地図に見る河川朝鮮時代の漢江を中心に」(2013年)はその成果の一部である。

朝鮮の歴史地理学は、朝鮮時代における知識人の地理認識、都城風水や墓地風水など、思想と地理との深い関わりを前提とする視点からの研究が主流をなしてきたが、歴史資料にあらわれる特定の地名がどこを指すのか、というきわめて具体的な事柄を一つ一つ整理していく作業を今後も継続していく必要であると思われる。

(3) 通信使が利用した使臣船に対する研究を進め、使臣船の構造的特徴を明らかにした。その過程で、これまで朝鮮伝統船研究に利用されてこなかった絵画資料数点が現伝することを確認した。その成果の一部は論文「朝鮮伝統船研究の現況と課題 近世の使臣船を中心に」(2013年)として公表した。

口頭発表「天理大学附属天理図書館所蔵『東槎録』と金仁謙著『日東壯遊歌』」(2014年)は、使臣船研究を目的とする使行録の分析過程で得られた副次的な成果である。研究代表者は以前、天理図書館所蔵の『東槎録』が、ハングルで書かれた唯一の使行録として知られる『日東壯遊歌』の著者、金仁謙の著作である可能性を指摘したことがあるが、本発表では両書の具体的な記述内容を比較、分析した上で、共通点と相違点を示し、『東槎録』の史的価値について論じた。

また朝鮮総督府水産試験場が1910~20年代に行った在来型漁船に対する研究報告書『朝鮮漁船調査報告』を分析した結果、同報告書が近代的な造船工学による精緻な研究成果であり、前近代の伝統船に関する文献資料がほとんどないなか、貴重な資料であることが明らかになった。その過程で1910~20年代の在来型漁船の船体構造が、近世のそれと大きく変わらないものであることが確認できた。その成果の一部は論文「朝鮮総督府『漁船調査報告』にみる植民地期朝鮮の伝統船 一九一〇~一九二〇年代の在来型漁船の船体構造」(2013年)として公表した。

近年、韓国では国立海洋文化財研究所を中心に水中考古学が大きな進展を遂げている。2014年には忠清南道泰安郡馬島沖の水中から、朝鮮時代のものと思われる沈没船が発見された。これまでも韓国では高麗時代の沈没船がいくつか発見されていたが、朝鮮時代の船の発見は初めてのことである。こうした水中考古学の発見は、決して盛況とはいえない朝鮮伝統船研究の進展に大きく寄与するものと期待される。ただし、構造体としての船舶の姿が明らかにされるだけでは歴史研究としては十分とは言えない。船舶の構造とともにその利用実態に関する研究が今後も継続される必要がある。

(4) 朝鮮時代の王都である漢城の南郊を流れる漢江は、河川水運による交通運輸の大動脈であった。一方、漢江には橋が架けられていなかったため、王都と地方とを結ぶ陸上交通路を分断する存在でもあった。そのように

河川や海によって断たれた陸路と陸路を互いに結ぶ装置が津渡(渡し)である。

朝鮮政府は建国まもない時期から、漢江岸の主要な津渡を官営化した。本研究では、朝鮮前期における漢江の官営津渡について制度史的な分析を加えるとともに、事例分析を通して、その管理運営の実態を考察した。口頭発表「朝鮮時代の漢江津渡 近世日本との比較」(2012年、韓国語)は、朝鮮と日本の津渡(渡し)制度を比較研究したものである。

朝鮮建国当初、漢江における官営津渡は1箇所だけだったが、15世紀のあいだに5箇所に増え、これを国家次元で管理・運営した。その詳細については論文「朝鮮前期の漢江津渡 渡丞制下の京江津渡を中心に」(2013年)として公表した。

前近代の朝鮮社会で津渡が果たしてきた役割が、朝鮮史研究において注目されることはほとんどなかった。本研究では、きわめて限られた時期と地域を対象としながらも、津渡が陸路の一部であると同時に、水路の一部でもあり、前近代の交通路および人と物の移動を体系的に考える際に、欠かすことのできない重要な構成要素であることを明らかにした。今後はより広い時期、地域にわたる個別研究を進展させ、津渡に対する体系的理解を深める必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

長森美信「朝鮮王朝実録をどう読むか 「正史」と「史実」」『アジア研究』10、75~81頁、2015年、査読無

長森美信「朝鮮前期の漢江津渡 渡丞制下の京江津渡を中心に」『年報朝鮮學』17、15~46頁、2014年、査読無

長森美信「朝鮮時代の海、そして船」『世界史の研究』234、50~54頁、2013年、査読無

[学会発表](計3件)

長森美信「天理大学附属天理図書館所蔵『東槎録』と金仁謙著『日東壯遊歌』」第65回朝鮮学会大会、2014年10月5日、於 天理大学(奈良県天理市)

長森美信「前近代朝鮮の地誌・地図に見る河川 朝鮮時代の漢江を中心に」韓国・朝鮮文化研究会第43回研究例会、2013年2月2日、於 東京大学(東京都)

長森美信「朝鮮時代の漢江津渡 近世日本との比較」(韓国語)2012年道の歴史研究団国際学術会議「交流の様相

と道の政策 韓国と日本』、2012年6月
16日、於 木浦大学校（大韓民国（全羅
南道務安郡）

〔図書〕（計 1 件）

森平雅彦編『中近世の朝鮮半島と海域交
流』汲古書院、2013年、450頁。第二部
第三章「朝鮮伝統船研究の現況と課題
近世の使臣船を中心に」および第四章
「朝鮮総督府『漁船調査報告』にみる植
民地期朝鮮の伝統船 一九一〇～一九
二〇年代の在来型漁船の船体構造」を
執筆（351～437頁）。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長森 美信 (NAGAMORI, Mitsunobu)
天理大学・国際学部・准教授
研究者番号：50412135